

静岡

朝鮮通信使 史料から説く

徳川みらい学会が講演会

徳川時代の歴史的意義を研究、発信する「徳川みらい学会」は19日、本年度の第2回講演会(静岡商工会議所共催)



史料に基づき朝鮮通信使の位置付けを語る
村井東大名誉教授＝静岡市葵区

を静岡市葵区で開いた。日本の対外関係史に詳しい歴史学者の村井東大名誉教授が、江戸時代に朝鮮から日本へ派遣された朝鮮通信使をテーマに講演した。

村井名誉教授は九州と朝鮮半島の間にある対馬(長崎県)の立ち位置に着目。朝鮮との交易で利益を得ていた対馬の支配層が、幕府の文書を偽造して朝鮮に送ったり、禁止された鉄砲の輸出をする代わりに朝鮮人参(にんじん)を輸入していたりした江戸時代初期の史料を示した。対馬と朝鮮の生々しいやりとりを踏まえて、日朝関係に「対馬の意向が大

きく絡んでいた」と説いた。

朝鮮通信使については全12回のうち、江戸時代初期の1〜3回は性格が異なり、対馬勢力の意向が色濃く反映された「多重外交だった」と指摘。1630年代の対馬支配層の内紛「柳川一件」を契機に幕府が対馬への関与を強めたとし、「日朝関係を根本的に変えた。われわれがイメージする朝鮮通信使はその後の姿だ」と説明した。